

## これで生きていける!

「巨大な堰の全貌が見えた時、皆がしばし作業の手を休め、うっとり眺め入りました。敷きつめた巨礫を流れる水が余りに美しいのです。説明抜きに、誰にでも分る美しさです。それは人と自然が和解した瞬間でもあったでしょう。また、命に直結する清らかな美です。『これで生きていける!』多くの村民は、そう思ったと言います。」

——中村 哲 (ペシャワール会報115号、2013年)

## アフガニスタンの苦難は続く

——干ばつ、地震、大洪水、そして経済制裁

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長/ペシャワール会会長 村上 優まさる

### 八月下旬の大洪水

アフガニスタンはつくづく多くの苦難を背負って、現在があるのだと再認識しています。二〇二二年は、前年以上に干ばつの深刻な影響が出ると予想されていました。クナール河の水位は、PMSが測定を始めて以来、最低のレベルで推移していました。その原因は昨年冬の雪が少なく、雪解け水で水位が上がる時期に來ても上がらなかつたことに加えて、降雨も少なかったことが考えられます。

一方で六月二二日にアフガニスタン東部で地震があり、ホースト州の大きな被害が報じられました。この頃から局地的なゲリラ豪雨があり、PMSの活動地域でもマルワリード用水路に被害が出て、そのたびにPMSスタッフが出勤して対応しました。八月二五日からの豪雨は広範囲だったようでクナール河の水位が一気に上がり始めました。十二年前、「二〇一〇年洪水」と中村

医師が呼ぶ百年に一度の豪雨があり、それ以降はこの時の水位に対応できる灌漑施設の造成(取水口、護岸、遊水池の設置など)を目指してきました。

今回はこの二〇一〇年洪水を超える水位でしたが、何とか持ちこたえて大規模な氾濫は防ぐことができました。人的被害はなく、家畜も避難させて無事でした。しかし護岸が崩落するなど多数の被害が出ており、被害の全貌については水が引いてから入念な調査が行われる予定です。

郡より避難指示が出ているなか、カシコート堰周辺で見守っていた村の青年たちは、重機とともに駆けつけたPMSスタッフの登場を、「PMSが来た!」と歓声をあげて迎えたそうです。PMSへの信頼感が嬉しかったと報告がありました。バルカシコート事業地周辺の村も谷あいには設置された二七基の砂防堤により、土石流の被害は防ぐことができました。長老が谷を見て「洪水はどこに行った」と驚いた様子など、喜び

を共有できる一体感、この関係性が最も大切だと実感しました。

クナール河はジャララバードでカブール河に合流し、パキスタンとの国境を越えてアトックでインダス河と合流します。インダス河下流の大規模な氾濫でパキスタン全土の三分の一が水につかるなど大々的に報道されています。当然アフガニスタンでの被害も大きいと推測されますが、八月二六日にタリバン政権からの国際社会への支援要請が報じられただけで詳しい情報は伝わっていません。

パキスタンの洪水については、旧PMS基地病院（ペシャワール）の元事務長で、病



ベスード護岸線。洪水で大きく洗掘され、木が流されている。  
(2022年8月27日)

院を引き継いで医療・福祉活動を行なっているイクラムラさんより八月二九日に連絡が入りました。イクラムラさんは洪水被災地（カイバル・パクトゥンクワ州・旧北西辺境州のノーシェラ）に入り、食糧不足で特に子どもや弱者に著しい被害があったため、食糧支援を行なうとのことでした。

同地域はペシャワールから一時間ほどのところで、中村医師にとっても馴染みの深い地域です。ペシャワール会として、限りはありますが、イクラムラさんの救援活動を財政的に支えることに関わってまいります。

### 報道されない「不都合な真実」

タリバン政権が復活して一年、世界に、そして日本に流布した報道はどのようなものだったでしょうか。再びめぐってきた八月十五日、報道各社は濃淡に違いはあるものの、一年前と変わらぬ画一的な「タリバン政権の悪」を強調する論調に終始していました。曰く「アフガンは再びテロの温床に」「女性への抑圧」などです。アフガニスタンの悲惨な現実―多数の飢餓線上の人々、二人に一人の貧困、栄養失調の子ども、臓器売買など―は全てタリバン政権によってもたらされたと言っていると言っても過言ではないでしょう。報道の全てを検証することはできませんが、少なくともPMSが活動している地域の現状は報道とは異なっています。

この間の報道には重大な欠落があります。

それは、二〇年以上アフガニスタンを襲っている未曾有の干ばつについてほとんど言及していないことです。

二〇〇〇年、大干ばつの被害を目的の当たりにした中村医師は、医療活動の延長として、命を支えるには「水しかない」と灌漑事業に舵を切りました。干ばつはその後も波状的に進行し、二〇二一年春には、WFP（世界食糧計画）などが、アフガニスタン国民の半数二千万人が飢餓に襲われると警鐘を鳴らし、前政権も六月には危機感を表明していました。

二〇二二年六月時点で、大河クナールの水位はこれまでの最低レベルで推移していました。干ばつと洪水が同時に起こる現象は今や世界各地で起きていますが、急峻な山々が連なるアフガニスタンでは、それがより荒々しく激しく現れているのです。

『不都合な真実』（アル・ゴア）として知られたはずの地球温暖化は、今でも「不都合な真実」として隠されたままなのです。アフガニスタンは二酸化炭素の排出量が一人当たり、米国の約七〇分の一、日本の四〇分の一の最貧国です。その国が地球温暖化の影響を最も強く受けて干ばつによる飢饉が起こり、飢餓に苦しんでいるという「真実」は不都合なこととして無視されています。

中村医師が医療・農業・灌漑水路事業に邁進していた三五年間にアフガニスタンでは六回の政権交代がありました。一九七九年の旧ソ連軍侵攻以降、アフガニスタン

は戦火に包まれていました。中村医師の背後には常に戦乱があったのです。昨年八月、兵力七万のタリバンが米欧の支援を受ける三〇万の政府軍を無力化したということは、国民の九〇%を占める貧しい農民たちが、戦乱よりも治安を求めたということだと思います。この事実を直視せずにアフガンを語ることは出来ないと思います。

中村医師が支えていたのは困窮する農民・遊牧民たちでした。今、干ばつと経済制裁によって彼らの命がさらに脅かされています。彼らの命をつなぐ支援を続けていくことが私たちの役割だと改めて肝に銘じています。

### 経済制裁と貧困化

二〇二一年八月より経済制裁のために現地への銀行送金ができなくなり、十月からはなんとか他の方法で送金していました。今年四月からは銀行送金が可能となったものの、安定しているわけではありません。米財務省は人道支援のNGOからの送金は可能と述べていますが、一筋縄ではいかないようです。一方では急速な円安のために日本円の送金額を増やさなければなりません。アフガニスタン国内の銀行からドルで引き出す際の制限は緩和されましたが、まだ十分とはいえません。

アフガニスタンでは経済制裁やウクライナでの戦争によって石油が高騰しています。そのため、用水路工事用の重機のレンタル

会社より値上げを通告されました。とはいえ、PMSはよいほうなのです。アフガン経済は悪化し、公務員の給与も円滑には支払われておらず、失業者は増加、物価は高騰するなど、貧困化が進んでいます。

### PMSの活動報告

①医療 他の医療機関の機能不全が進んでいるためか、ダラエヌール診療所では患者は増加しています。新型コロナウイルスもまだ蔓延している状況です。

治安が改善したので、病院職員たちが、以前PMSが運営し手放さざるを得なかった旧オキナワ・ピース・クリニックを訪問、映像が送られてきました。政府による診療所となりました。

②農業 一年を振り返ると、昨夏はレモンなどの柑橘類の収穫、秋の稲刈り、今春は麦の収穫やコメの作付け、養蜂など予定通りでした。サツマイモにも再挑戦しています。酪農は牛が三六頭で、ミルクは収入になっています。一方、灌漑ができていないダラエヌール溪谷の干ばつはひどく、井戸も涸れて村人が村を離れざるを得ない事態が迫っています。灌漑が生命線なのです。

③灌漑用水路工事 今年二月に斜め堰が完成したバルカシコートの工事が九月に完全に終了、五年間の経過を見て地元で完全譲渡されます。これまでPMSが造った用水路では、地域の農民による自発的な

浚渫しゅんせつ作業も行われるようになっていきます。管理を住民が率先して行うことで、用水路は地域に根づいていきます。

マルワリードIの取水口の拡張工事が十月から始まる予定でしたが、先に述べたアフガニスタンを襲う洪水の対応を優先するために、現政府に認可を受けていた工事計画の延期を申請します。

### 今後の展望

バルカシコート堰の完成に伴い、新しいPMS方式灌漑事業の候補地を、他州を含め絞りつつあります。JICA(国際協力機構)、FAO(国連食糧農業機関)との共同事業です。九月には候補地が内定、来春のゴースサインを待ちます。

アフガンの治安は我々の活動地域では安定し、自由に行き来することができるようになりました。このことがナンガラハル州だけでなく、クナール州やヌーリスターン州でも灌漑事業ができると判断する根拠となりました。

バルカシコート地区で新しく砂防堤二七基が完成しました。谷間から流れ下る鉄砲水の緩流化を図る試みです。今回の洪水でこの砂防堤が有効であることが示されました。

また、ナンガラハル州南部のコット郡における地下遮水壁や谷間の用水路など小規模な灌漑事業の取り組みを検討しました。干ばつがなかった何十年も前は、山々の雪解

け水の小川や、時に降る天水で灌漑をして農作業に励んでいたことでしょう。そんなのどかな光景を想像しています。

### おわりに

中村医師には、戦争と迫害に疲れ、自然の猛威に襲われた人々への深い共感がありました。一見異質な文化、異なる宗教や価値観、風土に規定された外皮の裡に、共通の人間を発見すること、そしてその悩みや悲しみ、喜びや希望を共有しようと努力すること、その過程のなかで、平和と共生へ

の道を求めました。今こそ中村医師の声に耳を傾け、その精神を道標に自然と人、人と人との和解を求めてペシャワール会／PMSは歩んでまいります。

「自然から遊離するバベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人との和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている。」(『天、共に在り』)